

序にかえて

20 世紀はもう間もなく閉じようとしており、21 世紀は目前にある。医学、生物学の 21 世紀は脳、神経の世紀となることに疑いはない。脳、神経機能の解明にどのようにアプローチするかは大きな問題であるが、そのひとつが薬物をツールとして脳、神経にせまることであろう。『生体の科学』誌は 1991 年の倍大特集号で「神経系に作用する薬物」をあつかった。その時私達編集委員は、10 年後に同じ特集を完成した形で出すことを序文でお約束した。

今、1998 年はその時から 7 年しかたっていない。10 年を経ずして、この領域は完成したのだろうか。残念ながら完成したとはいえない。しかし、この間に神経領域での薬物作用機序の解明は非常に進んだ。21 世紀に向けてこの進歩をまとめて示すことを脳、神経領域の研究者は強く求めている。私達はあえて未完成でもこの特集を出して、その要請に応えようと考えた。

この領域の細胞レベルでの進歩は、本誌で見られるように著しいものがある。残された問題は、本誌でも多少は手をつけられているが、ヒトの脳疾患に対するものであろう。これには三つの問題がある。1 はアルツハイマーのような「ぼけ」に対するもので、2 は精神疾患に対するもの、3 はホルモン攪乱物質（環境ホルモン）と中枢の問題である。1 は脳といっても老化、変成の問題であり、ツールとして薬物を用い病態をさぐり、さらに可能なら治療へと目指すもので、数年後にはもっと明確になっているだろう。2 は治療薬はかなり成功しており、この効果をもとに病因の解明が行われつつある。この点はさらに進み、新しい治療薬の導入が行われ、精神疾患の実体ももっと明らかになっているかもしれない。3 は全く仮定のもので、最近急速にふえた若年者の不可解な行動（「キレる」など）がホルモン攪乱物質と関係あるのではないかといわれている。ここでも数年後には私達に予想もつかなかった発展があるかもしれない。

21 世紀に入って、3 回目の特集が完成した形で出されることを期待していたきたい。

編 集 委 員